

「外国人犯罪」は本当に増加しているのか？ 久里浜少年院「国際科」を訪ねる。

「外国人の犯罪」は増加しているのか？

「外国人の犯罪が増加している」という言葉に出会うことがある。

2004年に内閣府が実施した「治安に関する世論調査」によると、「治安が悪くなった」と思っている市民は86.6%にのぼる。

またその理由(複数回答)では、「外国人の犯罪グループや不法滞在者」が54.4%となっており、日本の市民が「外国人の犯罪によって治安が悪化している」という漠然とした印象を持っていることがわかる。

しかし、「外国人の犯罪によって治安が悪化している」というのは事実なのだろうか。

たしかに外国人による一般刑法犯の検挙人員は、2005年に過去最多の1万4786人を記録した。これはマスコミにも大きく報じられ、「外国人犯罪」を大きく印象づけることになった。

しかし、そもそも全国の刑法犯検挙数自体が、この前年に過去最多を記録しているのだ。「外国人犯罪」だけが「過去最多」なのではない。

「犯罪白書」によれば、2007年の刑法犯検挙人員に占める外国人の比率は3.6%にすぎない。

日本の人口に占める外国人の比率(1.6%)に比べれば高いことも事実だが、けっして外国人の犯罪が突出しており、そのことが「治安悪化」の原因となっている、などということはない。

10年前と比べても、検挙人員における外国人の比率はほとんど変わっていない。外国人登録者数がこの10年で1.5倍に増加していることを考えれば、外国人の犯罪率は逆に減少している、とさえ言える。

「不法(非正規)滞在」とは何か

もうひとつ注意が必要なのは、「外国人犯罪」には出入国管理及び難民認定法(入管法)違反などの、日本人には起こりえない「犯罪」も含まれているという

ことだ。いわゆる「不法(非正規)滞在」である。

この非正規滞在者は、けっして犯罪を目的に日本にやってきたわけではない。多くは困窮する国々から日本の高い賃金を求めてやってきた労働者である。

日本は南米からの日系人を除き、一貫して外国人労働者の入国を限定的にしか認めてこなかった。

しかし日本の側にも、安価な外国人の労働力を求める需要がある。そのため、制度のはざまで「オーバーステイ」や非正規滞在などが生じる。法律が、現実に合わせていないのだ。

この4月、中学生の娘を残して国外退去処分を受けたフィリピン人のカルデロンさん一家のように「偽造旅券で入国した



▲カルデロンさん親子

が、その後10数年にわたって地域でまじめに生活してきた」ケースを、どう考えればよいのだろうか。

この一家は「非正規滞在」者には違いないが、「治安を悪化させる凶悪な犯罪者」にはほど遠い。

しかし「外国人窃盗団」などという報道が繰り返されると、そのイメージがすり込まれ、「外国人の増加で治安が悪化する」という風説が広がってしまう。

このような外国人に対する偏見が最悪の事態を生んだのが、関東大震災の際に起きた朝鮮人虐殺である。

「朝鮮人が井戸に毒を投げ込んだ」などという流言が広がり、多数の罪もない朝鮮人が殺害された歴史を、私たちは忘れてはならない。

久里浜少年院「国際科」を訪ねる

ペリー来航の記念碑にほど近い三浦半島の一角に、久里浜少年院がある。

ここには「社会復帰のため特別に日本語指導を要する」と判断された外国籍の少年たちが全国から送られてくる、全国にただひとつの通称「国際科」がある。



▲久里浜少年院

南米などから出稼ぎに来た日系人の子が多く、犯した罪は窃盗や強盗、傷害など。ほとんどが初犯という。

私が訪れたとき、院内の教室では作業着に頭を丸めた少年たちが日本語の授業を受けているところだった。

「『歯医者』。はい、繰り返してみよう」

「ハイシャ」

「骨折」

「コッセツ」

「そう、骨を折ること。わかりますか？ 医者にかかるとき、この言葉を知らないと困りますね。」

日本語の教官と2人の職員が11人の少年たちの机間をめぐり、一人ひとりについていねいに指導をしている。

「日本語指導というより、社会で暮らしていくための手段を教えているんです。ここにいる少年たちはコミュニケーション能力の不足が一因で日本社会に馴染めず、ドロップアウトしてしまった子が多いんです」と、「国際科」担当の柴田主席専門官は話してくれた。

少年たちの歩み

なぜ彼らは犯罪に走ったのだろうか。その背景には、外国人にとって厳しい日本社会の構図が見えてくる。

かつて、東京新聞が久里浜少年院を取材した記事で紹介されていた少年の来歴は、次のようなものだ。

日系ブラジル人のロベルト（仮称）は、10歳のときに両親に連れられて日本にやってきた。

ブラジルでは成績も優秀な少年だった。しかし小学校の4年生に編入したが、日本語がわからない。授業もわからず、ノートもとれない。必死に話す日本語は、同級生にまねされ、笑われた。

両親は仕事で忙しく、あまりかまってくれない。「ブラジルに帰りたい」と思って何度も泣いた。

やがて不登校になったロベルトは、そのうちに同じようにドロップアウトした外国人の少年たちのグループとつきあうようになる。

そこでロベルトは、車上荒らしに誘われる。誘いを断らなかったのは、金がほしかったからだけではない。自分を理解してくれる場所は、日本には他になかったのだ。

仲間はずれにされれば、ロベルトの行き場はなかった。彼は窃盗団に加わり、やがて逮捕されて少年院送致となる

この少年のようなケースが、典型的な例だという。

「人としての大きな違いはない」

もちろん、どのような背景があろうと犯罪行為を肯定はできない。同じような境遇の中で、ほとんどの外国の少年たちは一生懸命に生活している。

しかし、日本の社会に理解がもう少しあれば、彼らの歩みは違ったのではないか。私は、柴田主席専門官にたずねてみた。

竹村 「外国人の犯罪が増加している」というのは、事実なのでしょうか？

柴田 私は統計的なデータを持ってはいませんが、ただ、マスコミなどで具体的な根拠もなしに「外国人犯罪の増加」などと発言している方を見ると、違和感を感じます。

竹村 外国人の少年は、犯罪性向が強いのですか？

柴田 いえ、久里浜少年院にいる外国の少年が特に粗暴だったり、攻撃的で手を焼くということはありません。日本人の少年と比べて、人としての大きな違いを私は感じません。

竹村 文化の違いが誤解されることもあるのでしょうか。

柴田 夜中まで同じ国の仲間が集まって騒いだり、ゴミを投げ捨てたりという、母国では何でもないことで周辺から問題にされることがよくありますね。

竹村 私は以前、中学校の教師をしていたのですが、クラスに「乱暴な子」と言われていた外国籍の子がいたんです。でも、よく見てみると、周囲との意思疎通がうまくいかないんですね。

日本語での言い争いになったら、かなうはずがない。日本人の友達も結局は日本人の側につく。結局手を出してしまい、乱暴と言われてしまう。

柴田 日本人の少年たちも、多くはそうなんですよ。自分の考えをちゃんと言葉で伝えられないから、結局暴力に訴えてしまう者が多いんです。

だから、少年院では「自分の考えをきちんと伝える」ことが、指導の大きな中身なんです。

柴田専門官の「人としての大きな違いを私は感じません」という言葉が、重く残る。

外国人である・なしにかかわらず、犯罪を認めることはできない。しかし問題は、多文化共生社会を否応なしに迎えているにもかかわらず、それに対応できていない日本の社会や制度にもあるのではないだろうか。

個人の犯罪を特定の国籍や人種に結びつけて、外国人をあたかも「犯罪予備軍」のようにみなすことがあってはならないのだ。